●国内外の底辺の諸相

アメリカン・ホームレス——米国発信のホームレス文献、一九九四年～一九九九年

トム・ギル

要約

アメリカのホームレス人口は日本の約一〇～二〇倍であり、問題の規模を反映して、ホームレス関連の研究書が数多くある。本稿は、一九九四年から九九年までにアメリカで出版されたホームレス関連文献五冊を取り上げ、内容を整理すると共に、日本のホームレス研究に示唆的な事実や論点を提起した。取り上げたのは、政策問題としてホームレス問題の全体像を描いたジェンクス「ホームレス」（邦訳あり）、「世界のホームレスの分析」を目指したグラッサー『地球全体で見るホームレス』、北米のホームレスのパターン・脱出・路上残存をあつかったグラッサーとブリッジマンの共著『ストリートをものともしない——ホームレスの人類学』、「精神障害あり」とされるホームレスの人々を取り上げた民族誌的研究であるデジャレー『シェルター・ブルース——ホームレスな人々における正気と自主性』、詳細なアウトリーチ事業の民族誌であるロウ『境界を超えて——ホームレスな人々とケースワーカーの出会い』の5冊である。これらの書評を通して、増え続けるホームレス人口に対するアメリカ社会の根強い混乱を示した。アメリカにおけるホームレス研究および連邦・州・都市行政の成功例や失敗例から、ホームレス問題の解決のために日本社会が学べる点は少なくない。

はじめに[1]

日本の野宿者人口は益々増えており、ようやく行政も「社会問題」として認めるようになった。二〇〇〇年から国の予算にホームレス対策という項目ができ、当局が

僅かながらシェルターを作り始めている。しかしホームレス対策は決して簡単なものではない。日本政府は対処の経験がないし、下手をすると逆効果をもたらすこともありうる。そこで、経験者から学ぶのがコツである。ホームレス問題といえば、アメリカは日本の大先輩である。アメリカのホームレス人口は日本の約一〇～二〇倍だとされ、シェルター人口はおよそ百倍程度とされる。

問題の規模を反映して、アメリカのホームレス関連出版物も数多い。毎年百本単位の報告書、論文、本等が出ている。ここで取り上げる五冊の本は一九九四年～一九九九年の出版だが、先にそれらに影響を与えた主な書籍を簡単に紹介したい。

まず同じ一九七〇年出版の二冊の力作はこの五冊の全てに引用されている。You Owe Yourself a Drunk（「一回酔っ払ってもいいじゃないか」、ジェームズ・スプラドレー著）とStations of the Lost（「迷子の逃げ場」、ジャクリーン・ワイズマン著）である。この二冊は共にまだ出版中であり、この分野の必読書といえる。前者はシアトル周辺の、頻繁に泥酔や浮浪罪で逮捕・拘束されてしまう「浮浪者」たちを描いている。後者は宗教団体や社会運動団体が野宿のアルコール依存者に提供する様々なシェルターを描写する。スプラドレーとワイズマンの共通点はスキッド・ロウのホームレスたちの仲間意識への憧れ、それに主流社会の野宿・アルコール依存症への対応のまずさを批判している点で、書評対象の著者達にアピールするのではないか。

また、八九年～九三年までに出版された以下の五冊の本も大きな影響があったと思われる：Down and Out in America（「アメリカどん底」、ピーター・ロシー著八九年）、Over the Edge（「淵を越えて」、マーサー・バート著、九二年）、Tell Them Who I Am（「私は誰なのか言ってよ」、エリオット・リーボー、九三年、和訳、リーボー一九九九年）、Down On Their Luck（「つきに見放されたやつら」、デーヴィッド・スノー、レオン・アンダーソン著、九三年）そしてCheckerboard Square（「チェッカーボード広場」、デーヴィッド・ワグナー著、九三年）である。

ロシーの書は、社会政策の観点から見た総括的な野宿・極貧問題の研究である。主なソースは一九八五～六年、自身が行なったシカゴの調査だが、三〇件以上の様々な都市の調査も丁寧に取り上げている。（その調査は全て使いやすい索引とともに本書に掲載されている）。バートのものは大規模な量的調査の報告書で、一九八七年当

時、人口一〇万人以上のいくつかの都市を無作為で抽出・調査している。この調査はUrban Institute(都市研究所)という研究機関が企画したもので、バートはそのプロジェクトの主査だった。

リーボーのものは実に興味深い民族誌である。前著、Tally's Corner(タリーの街角)は、三〇年以上も前(一九六七年)に出版されたもので、ワシントンDCの底辺社会の黒人を取り上げた。今回はホームレスの女性たちが対象だが、ベテラン民族学者のリーボーはさすがにインフォーマントたちの考えを重んじており、一旦書き上げたテキストを彼女たちに読んでもらって、コメントを付け加えている。(やや似たアプローチは山崎と瀬戸のHIV患者の著作(二〇〇〇年)にも見られる。)スノーとアンダーソンは社会学者で、基本的なスタンスは「誰でも、運が悪ければ、ホームレスになりうる」だが、彼らが言う「運」は単なる迷信的なものではなく、個人の性格と社会状況の微妙な交錯を意味する。ワグナーはアメリカ的資本主義の雄弁な批判者で、他の著作では米国文化が人間行動の全てを美徳と罪に区分するという妄想(Wagner 1997)、そして社会福祉を民間慈善事業に任せてしまう傾向(Wagner 2001)を弾劾している。「チェッカーボード広場」はあるスラム街の仮名。場所は「ノース・シティー」(これも仮名)という米国の北東部の中型都市である。これも生き生きとした民族誌で、ホームレスの人々を巻き込む厳しい社会経済環境への抵抗が主なテーマだ。

以上はここで書評する本に大きく影響を与えた主な先行文献である。

***The Homeless*, by Christopher Jencks**

クリストファー・ジェンクス著、『ザ・ホームレス』Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1994, xii+161pp.

クリストファー・ジェンクスはハーバード大学の社会政策の教授で、有名な社会階層論者である。他にもRethinking Social Policy(社会政策再検討、一九九二年)がある。ここで紹介する他の著者と違って、自分で行った調査が一切なく、彼が本物の野宿者と出会ったことがあるかどうかさえ明らかではない。その代わり、統計的な二次研究の解釈が主な方法である。上から見た、政策問題としてのホームレスの全体像を描いた試みである。

ホームレス当事者からの概念的な距離はタイトルから

もうかがえる。Homeless people（ホームレスの人々）ではなく、The Homeless（ホームレス達）である。このように「人間」を省略し、形容詞を名詞として使う（The poor, the unemployed, the underprivileged; 貧困者、失業者、恵まれない者等もある）は古い社会病理学的な表現であり、差別的と見なされることもある。だがジェンクスは頻繁に、そして平気で、この表現を使う。まして、運動家等を怒らせる'politically incorrect'（差別的）な表現を好んで用いている点にはひねくれた楽しみさえ見られる。例えば：

（月割りで部屋を借りるより日割りで借りるほうが割高である理由に関して）「日割りで借りられる部屋がよく空くこと、それに部屋代を日割りで払う場合玄関でゲロを吐く恐れがより強いこと。」（七〇頁）

または

「結婚率の減少だけではホームレス率がそれほど上がらない。未熟な女たちが結婚しないくせに子供を産み続けたことが彼女たちのより多くを路上に追い出した。」（五八頁）

第一例文で見るように、ジェンクスは肉眼で物事を見ていないくせに、露骨な表現を遠慮なく使う。第二例文では統計データを元に、大きな社会集団（この場合は母子家庭だが）に対して教訓的な判断を下す。しばしばその判断には「ホームレスになるのは自分のせい」というほのめかしが隠れていることも感じる。

こうした点から、ジェンクスを読んでいるとどうしても怒りや苛立ちを感じる。にも拘わらず、この本は注意深く読む価値があるのである。まずここで取り上げた他の本よりもずっと広く読まれており、アメリカにおけるホームレス問題の議論への大きな刺激になった。（ちなみに唯一和訳が出ている文献でもある：ジェンクス一九九五年。）この本は右から左まで例外なく読者を怒らせているのだが、著者は世評を気にせずひたすら統計を解釈し、実りのある結論をいくつか出してもいる。だから先入観をひとまず脇に置いて、冷静に読むべきだろう。

一六〇頁の短い本の一二章は大まかに4部に分けられている。（1）ホームレス人口とその増加具合の計算、（2）その増加の「有力な説明」、（3）その「あまり有力でない説明」、（4）対策の提案。

ホームレス人口を算出するにはまず「ホームレス」の定義が不可欠である。ジェンクスはホームレスを基本的

に、路上生活者(street homeless)とシェルターの利用者(sheltered homeless)の二種類に分ける。「シェルター」の定義も困難で、シェルターという名前が付いた施設に加えwelfare hotel(ホームレス家族の仮住宅として地方の自治体が使う格安ホテル)も入れている。しかしアメリカによくある「二重家庭」(一つの住宅に二つの家族が暮らしている現象、英語ではdoubling upという)を、大きな社会問題として認めながらも計算に入れていない。刑務所、留置所、トラ箱、精神病院等にいる人も計算外にし、本の対象を「見えるホームレス」に絞る(七頁)。

この定義をもとに、そして上記のロシー(八九年)とバート(九二年)を主なデータ源にして、ジェンクスは次のように全米ホームレス人口を推算している。約一二五、〇〇〇人(八〇年)から、八年間で三倍以上増加して約四〇二、〇〇〇人(八八年)、そして二年間で二割減少して、約三二四、〇〇〇人(九〇年)になる(一七頁)。この数字は充分ショッキングではあるが、当時マスコミや運動家の一部の間で言われていた「数百万人」より政府の概算に近かったため、進歩派から批判を浴びた。だがジェンクスの数字が実態に近いのではないかという印象である。

さて、「有力な説明」は四つある。

1. 精神病患者の社会への流出。一九五〇年に、米国の州立病院には五〇万人以上の精神病患者がいた。だが一九九〇年には一〇万人になっている(二五頁)。患者を入院させるより安定剤等の薬を与えるのがこの数十年の傾向であるし、一九七五年の最高裁判所の判決以来、当事者の承認なしで人を精神病院に収容するのは極めて難しくなっている(二九頁)。個人の権利を尊重する自由主義の政策と、財政支出低下を目指す保守主義の政策がちょうど合致した結果、大勢の精神病患者が病院から追い出された(または、入院すべき人が入院しなくなった)だけで、残念ながら病院での治療の代わりになるしっかりした仕組はなかった(三九頁)。九〇年代の研究は大体ホームレス人口の二〜三割が何らかの精神病を持つと推算する。

2. クラック・コカイン。八〇年代の中ごろまで、コカインの使用は金持ちの習慣だったが、クラックという格安・低質コカインの到来によって一回分一〇ドルの時代が始まり、九四年には3ドル〜5ドルまで下がった(四一頁)。伝統的にはアルコールは貧困者の主な麻薬だったが、クラックによりもう一つの選択肢が生まれた。アルコール依存に抵抗できた人の一部がクラック依存には抵抗できなかった。一九九一年、ニューヨークで行った

尿サンプル調査によると、シェルター利用者の六六%がコカインに陽性だった。ジェンクスはコカイン依存症が野宿生活の原因だけではなく、結果ということもあると認識しているが、とにかく以前にはなかった種類の依存症が現在存在することが、ホームレス人口増加にある程度影響するのは当然だとする。

3. 職業と結婚の関係要素。政府の統計によると一年間以上完全に失業している労働可能年齢の男性は、一九六九年の五%から一九八九年には一〇%と、二〇年間で倍増した(五一頁)。一方、未熟練労働への需要はこれ以上のペースで減った。同時に結婚率減少・離婚率増加のせいで、失業中の男女とも、支援してくれる配偶者・家族がいないケースがだんだん多くなった。

4. スキッド・ロウの解体。全米センサスによると、一九六〇年には約六四万人が(主に格安の居住用)ホテルに暮らしていたが、一九九〇年には約一三・七万人と大幅に減少している(六四頁)。日本のドヤにあたるSROs(Single Room Occupancy hotels、ワンルーム・ホテル、つまり専用の風呂や台所のない部屋で構成される簡易宿泊所)がこの三〇年間で激減したのが主な原因だとされる。では、SROはなぜ消えたか?それは、gentrification(高級住宅化)の結果とするのが定説である(下記のGlasser and Bridgman 1999: 49-51もそうだが)。つまり、大都市の中心にありがちのSROホテルの多くは解体されて、代わりにミドル・クラスのための、より儲かる住宅を建てるという現象である。ジェンクスはこの定説をある程度まで認めるが、一旦解体されたSROがなぜ都市の別な地域で立て直されなかったかという疑問を提示する。その理由は進歩的な動機で厳しくなっていた建設規制ではないかと述べている(七三頁)。戦前建てられたSROやキュービカル(小寝室)ホテルはとっくに違法建築物になっている。こうした建物の不衛生さ、防火設置の不充分さ等は、もはや論外である。進歩派が貧困層の住宅改良の目的で、不良住宅を違法にしたが、同時に必要な改良住宅を作ったり、民間の改良住宅の(当然高くなった)家賃の補助金を出すための出資をする政治的決断はなかった。皮肉な結果として、「不良住宅」の代わりに、「住宅無し」となった。進歩派と保守派の間の争いの被害者はやはり貧困層であった。

次にジェンクスは三つの「あまり有力でない説明」を取り上げる。(1)「家族が機能しなくなった」——だが

一九八〇年と一九九〇年の統計を比較すると、家族はほぼ同じ程度で貧しい親戚に衣食住を与えていた(七九頁、三番目の「有力な説明」とやや矛盾?)。(2)住宅市場の変化――しかし相変わらず低家賃の住宅は相当高い空室率を示す(八三―八四頁、四番目の「有力な説明」とやや矛盾?)。(3)公営住宅の予算カット――但し極悪とされるレーガン政権さえ低家賃公営住宅の供給を減らしたのではなく、その増加ペースを緩めただけだった(九六―九八頁)。

第四部では、ジェンクスは「シェルターがホームレスを生み出す」という逆説を紹介する(一〇三―一〇六頁)。八〇年代の末まで、アメリカのシェルター・ネットワークはほぼ全国に広がっていた。毎晩の合計収容能力は約二〇万―三〇万人で、現在の日本の数字の一〇〇倍程度だ。沢山のシェルターがあると野宿生活の「痛み」は幾分減る。「野宿生活が前より厳しくなくなると、人々はそれを避けるために自分の誇り、自尊心あるいは次のコカインを買うことを犠牲したくなくなりがちである」(一〇三―一〇四頁)。つまり、極貧者にシェルターに泊まる選択がなければ、僅かの手持ち金で簡易宿泊所に泊まるかもしれないが、シェルターに宿泊できれば、浮いた金を別な商品に使う可能性が高まる。それは衣料品や食べ物であるかもしれない、麻薬や酒かもしれない、とにかく自分の金で宿泊を賄う可能性が減るのである。また、二重家庭で暮らしている家族はなかなか公営住宅に入居できないが、その二重家庭を出てシェルター生活を始めると家庭の状況は一層深刻に見えるため、より早く公営住宅に入れる節もある。また例えば失業中の男がずっと姉の家に同居し、彼女に始終振舞や態度を批判されるとする。シェルターがなければ、我慢し続けるとしても、シェルターがあれば姉の家を出てシェルター生活を始めるかもしれない。

ジェンクスはこういった行動を「野宿を選択する」と呼ばないよう注意を払って、むしろ「野宿の違う種類を選ぶ」(つまり二重家庭や簡易宿泊所も一種のホームレスな生活である)と解釈するが、やはり「ホームレス自発選択論なのではないか」とホームレス運動家の批判を浴びた。しかし、シェルター利用者には直接路上から入った人以外に、「問題のある住宅生活」から入った人もいるのは別に驚くことではなかろう。ジェンクスが引用するある一九九〇年の調査によると、米国の大人の五・三%が路上生活またはシェルター生活の経験があるという。

驚くべき比率だ。やはり、シェルターの供給が増えれば、それに応じて需要もある程度増えることがあるだろう。それは完全に悪いことでもない。なぜなら、「隠れたホームレス」(二重家庭・スラム住民等)が「見えるホームレス」に、「統計に出ないホームレス」が統計に出るようになるということだからである。問題の根は、シェルターの有無ではなく、アメリカ社会のより深いところにあると言えるだろう。

シェルターを経営する自治体はこの逆説に非常に敏感(敏感すぎる?)であり、ホームレスではない人々がシェルター生活を選ばないように、意図的にその生活を不愉快にすることもある。ワグナーがインタビューした公務員はこう語っている。「利用者のためにもシェルターは快適にしてはいけません。そうしてしまえば利用者が殺到するし、彼らは泊まることが楽しくなってしまう(Wagner 1993: 102)。

さて、ジェンクスの解決案はどういうものか? まず野宿者を家族(主に母子家庭)と子供を持たない大人(主に単身男性)の二つのタイプに分類する。前者に関しては、保守的な共和党支援者が念仏のように繰り返す「シングル・マザーを働かせろ」という主張を否定する。その理由は観念的ではなく機械的だ。シングル・マザーは現在の米社会ではあまりよい賃金を得られないため、行政が補助しなければならない子供の保育所等の費用は、おそらく母の賃金を上回るはずだ。行政の立場から見れば、子育てに専念してもらって、必要な生活費を払った方が得だというのだ。一方ジェンクスは、母子家庭がホームレスにならないためには、行政は現在よりずっと多くの格安公営住宅を提供するべきだと主張している。その費用のためには一九九四年の年一八〇億ドルを倍増する必要があると指摘する(一一二頁)。今回怒り出したのは保守主義者だった。

単身男性の場合、ジェンクスの処方箋は「もっと寄せ場とドヤ街を作る」と要約できる。公営日雇労働市場を設定し、民間の会社の仕事を紹介する。あぶれた場合、社会奉仕活動(公園や公営施設の掃除等)を四時間させ、賃金の代わりに食事券三枚と小寝室ホテル(cubicle hotel)の宿泊券を渡す(一一五頁)。この小寝室ホテルはいくら粗末であっても、とにかく集団シェルター('congregate shelters'、下記のデジャレー本参照)の大部屋で寝るよりましだ。集団シェルターにはプライバシーがないため、誰でも入れるというわけにはいかない。酔っ払いや精神病

患者を入れれば、他の利用者の迷惑になってしまうからである。ジェンクスが言う小寝室ホテルはドヤより質が下である。窓がなく、むしろカプセルホテルにドヤの雰囲気が付け加わったようなものである。これは決して理想的な解決案ではないとジェンクス自身が認めるが、よりよい宿泊はより費用がかかる。アメリカの国民がその費用を自分の血税から出す意思がないのは厳然たる事実だと、現実主義者のジェンクスが判断する。

こういう計画を実行するには、沢山の新しい小寝室ホテルが必要になる。それらを建てるたびに周辺の住民からニンビー主義[2]の反対運動が予想できる。そこで、現在住宅街ではない地域に小寝室ホテルを集中させ、「スキッド・ロウを再現させる」(一一七頁)とジェンクスが提案する。ゲットー化の恐れを認めながら、それでも現在のシェルター文化よりましだという。これもまた、出版当時、言語道断だとの反発が運動家からあったそうだが、日本の現状から見ればすぐダメだと言い切れない気がする。アメリカのスキッド・ロウと違って、日本の寄せ場・ドヤ街はまだ健在である(ギル一九九九年)。ジェンクスの観点から見れば、ドヤ街は決して社会問題ではなく、重大な社会資産である。他所、マシュー・マーも、寄せ場がもつ格安宿泊ならびに日雇労働紹介という機能を充分生かせば、日本では福祉や慈善に依存する野宿人口のアメリカ並みの大型化が避けられる可能性があると指摘している(Marr 1997)。

そこでジェンクスの日雇労働市場の提案に注目したい。「民間部門であぶれても、公共部門の仕事が取れる」というのが大前提である。ジェンクスは「道徳の契約」(一一八頁)という箇所で、その公共部門の仕事は本物の、意味のある、価値のある仕事でないといけないと主張する。最近私が見学した大阪市・大阪府の外郭団体、「NPO釜ヶ崎」(特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構)は清掃・修理等「意味のある仕事」をある程度釜ヶ崎の労働者達に提供していると思うが、それでも資金が足りなく月二回ほどしか仕事を与えられない。これだけではホームレス脱出はとても無理だ。また、九〇年代の山谷で行われた就労企画では高速道路・公営霊園・埋立地の清掃が業務だったが、労働者に聞いた話だと実務はあまりなく、殆ど働かずに(僅かな)賃金がもらえたそうだ。つまり、「賃金」と呼ばれてもこの支払の実質は「施し」であった。これもまた月一〜二回しか取れない仕事だった(Gill 2001: 89-90)。これではジェンクスのいう「道徳の契

約」は成り立たない。より定期的に仕事を与えて、本当に働いてもらうのはどうか。日本のインフラの大部分は汚く、錆付いている。政府は公共事業の名目で要らない道路・橋・トンネルの建設に大金を無駄使いするのをやめて、代りに日雇労働者に公営学校や病院をよりよい環境にしてもらえば、皆のためだし、「独立した労働者」から「福祉に依存するホームレス」に少しずつ再定義されている日雇労働者に誇りと経済的な自立性を取り戻す効果もあるはずだ。「ボロじいさんでは仕事は無理」という常識をひっくり返すのは決して不可能ではないと思うが、まず中央政権と地方自治体のやる気が不可欠だ。

***Homelessness in Global Perspective*, by Irene Glasser**

アイリーン・グラッサー著、『地球全体で見るホームレス』

New York: G.K. Hall, 1994, x+154pp.

アイリーン・グラッサーは東コネティカット州立大学の教授で、専門は社会人類学である。デビュー作(Glasser 1988)はあるsoup kitchen(ホームレスに対する無料食堂)の民族誌で、長年ホームレス問題を研究している人物。この本はたった一二六頁で「世界のホームレス」の分析を目指すため、どうしても一貫性が欠けていて、表面的な指摘が多い。北米の資料に頼りがちで、世界の他の大部分は無視されている。ただ、文化相互間のホームレス研究に示唆的な重みは充分ある。グラッサーの研究は、エール大学の人間関係地域ファイル(Human Relations Area Files これは数十年も世界中の社会的データを集めている一大実証主義プロジェクトである。)の一環である。

ただし、その実証主義の限界は第一章で暴露される。ここでグラッサーは世界の国々のホームレス概念を比較しようとし、図でその概念を次の四つに分類している。(1)「住まいがない」、(2)「家庭やよその人間から孤立」、(3)「宿無し子」、(4)「スクォッター集落」。日本語の「浮浪者」は'floating people'と翻訳されて第二分類に入っている。同じ欄に英語の'homeless'、フランス語の'clochard'、ドイツ語の'Pennebruder'、南米系スペイン語の'desamparado'等が含まれている。こうした言葉を使う社会のホームレス概念は似ているという意味合いだが、グラッサーは他の日本語の表現を知らない。「浮浪者」

という言葉には確かに「主流社会から外れている」という意味が含まれているが、「アオカン」・「野宿」・「ホームレス」・「路上生活者」はむしろ第一分類(住まいがない)に近い。厚生労働省の官僚が「ホームレス問題」を語るとき、大体文字通り、「住まいのない人々」というつもりだろう。ところが、グラッサーが言うように、それは英語のhomelessの一番習慣的な使い方ではない。一番有名な定義は一九六八年、三人のアメリカ人の社会学者によって作られた以下のようなものである。

"Homelessness is a condition of detachment from society characterized by the absence or attenuation of the affiliative bonds that link settled persons to a network of interconnected social structures." (Caplow et al. 1968.)

「ホームレスというのは社会からの孤立の状態であり、その特徴は、定住民を社会構造の相互的ネットワークに繋ぐ提携関係が不在か希薄になっているというところにある。」

つまり、宿のありなしと特に関係のない定義である。この定義によるとほとんどの寄せ場労働者が自動的にhomelessとされることになりかねない。この「孤立」の定義の問題点としては、主流とちょっと違う生活形式が全て含まれてしまう可能性があることである。その反面、文字通りの「宿無し」定義は不安定・不充分な住宅状態にいる人々を無視して、ホームレス問題の規模を充分認識しない可能性という問題点がある。いずれにせよ、グラッサーの大雑把な文化的比較では、世界の各社会のホームレス概念の微妙な点をとうてい把握できない。

本書は主に四章編成で、それぞれホームレスの「男性」、「女性」、「子供」、「家族」を取り上げる。「男性」の章には、日本の唯一の出番があり、寄せ場の事情が一頁ちょっとで紹介されている(二〇~二一頁)。デンマーク、メキシコ、エジプトの男性ホームレスもホンの少しだけ紹介されるが、主な焦点はやはりアメリカのスキッド・ロウに当てられる。アルコール依存症・精神病・結核は一番の健康問題とされ、その中でもホームレスの男性のイメージは次第に「酔っ払い」から「狂っている」に移っているという(二〇頁)。アメリカで見られた精神病院からの患者の流出はイギリスやイタリアにもあったが、日本にはなかった。日本の精神治療制度では、本人の了解なしでも入院させるのは割合簡単だ。これは言うまでもなく人権問題だが、日本のホームレス人口に精神病患者が比較的に少ないという現象とも繋がっているとグラッ

サーが指摘する。その通りであろう。

ホームレス女性が男性より少ないのはほぼ世界中の共通点だが、グラッサーが言うように、性的暴力の恐怖等のため、女性は男性より隠れる傾向が強いから、女性ホームレスの統計の扱いには特に注意が必要だ。一九八七年の大型全米調査によると、シェルターや無料食堂の利用者は一九万四千人で、その一八%は女性だった。単身・子供持ちは半々で、白人四一%、非白人五九%。(男性の場合、白人四八%・非白人五二%ということであった)。アメリカやカナダの進歩的な女性専用デイ・ケアー・センターが紹介され、ケベックのChez Doris、トロントのSistering、ニューヨークのManhattan Bowery Corporationは特に日本のボランティア団体に示唆するところが多いであろう。インターネット・サーチを推薦する。

このホームレス女性の章で登場する話はほとんど先進工業諸国に限られている。第三世界の女性は大体子供がいるため、「家族」の章で取り上げられる。ここと「子供」の章にはブラジル、ネパール、ケニア、コロンビア、ペルー、ナイジェリア等の事例が出ており、焦点は第三世界へ移る。コロンビアのホームレスの子供たちには、四〇~五〇人ものストリート・ギャングを成す例があり、強力な部隊でありながら、家族を代替する機能も果しているという(六二~六四頁)。

定義の問題はしょっちゅう出る。例えばアメリカの一部の福祉行政は二重家庭の「第二家族」('sub-family')をホームレス統計に入れようとするが、そういう家族を探しだしたり数えることは困難である(一一四頁)。こういう問題もあり、全米のホームレスの子供の人口は、一〇万人から七〇万人と推定され、その間に、大きな相違がある(六五頁)。

最後の章ではホームレス統計の出し方が論じられているが、ここはより充実している。グラッサーは米国の一九九〇年センサスのホームレス調査とインドの一九九一年のそれを比較し、前者に関して大きな問題点を指摘している(一一二~一一七頁)。アメリカの調査員はどこでホームレスな人々を探せばいいか正確に分からないこともあったし、暴力の恐怖のためにホームレスに見える人に事情を聞く勇気がないこともあった。時には、あえて自動車から降りる勇気さえなかった。人的資源も限られていたため、どうしても数少ない「有名なホームレス地区」でしか調査が行われなかったし、調査の夜が大雨だったことも結果を混乱させた。それは「バッド・ラック」

だったが、やはり全国を同じ一日で調べるとこういう危険性がどうしてもある。それに、夜間調査だと調査員の安全性が気になるし、見つからないところで寝ている野宿者も多い。特にニューヨークの場合、地下のトンネルで暮らす人々が数千人いるとされる(Toth の「モグラ人」(一九九三)はその問題に関する話題作だ)。インドのセンサスでは、調査員は三週間もかけてホームレス地区の予備調査を行い、必要なら増援隊を頼めた。

ホームレス人口調査はいつも困難である。アメリカのセンサスでは「デコイ」(おとり捜査員)も使った。つまり、公務員がホームレスのふりをして、道路でぶらぶらして、果たしてセンサスの調査員に数えられるかどうかを確かめた。「確実に数えられた」と報告したデコイはニューヨークでは五二%、ロサンゼルスでは三五%、シカゴでは二五%だった(一一五頁)。これでは調査の信頼性が問われるのは当たり前だ。ちなみに、二〇〇一年のイギリス政府による路上生活者調査では全国にホームレスは五〇〇人しかいないという劇的に低い数字を出して、やはり調査方法が強く批判されている。[3] 日本では厚生労働省がようやくホームレス人口調査に取り組み始めているが、方法論に関してよその国の経験から学んでほしいところだ。

結論としてグラッサーはこう語る。「一番効果的なホームレス対策は、格安住宅を与え、各個人の生き残り戦略を尊重する、調子を抑えたアプローチから始まる路上生活脱出手法である」(一二四頁)。つまり、人々をポンとシェルターに入れるのではなく、既存の路上の生活ぶりとの妥協案を探るということである。ここにも、日本の行政が学ぶべき知恵があるのではないか。

***Shelter Blues: Sanity and Selfhood Among the Homeless*, by Robert Desjarlais**

ロバート・デジャレー著、『シェルター・ブルース――ホームレスの人々における正気と自主性』Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1997, ix+307pp.

ロバート・デジャレーはニューヨークにあるセーラー・ローレンス・カレッジの人類学の講師である。この一冊には実際に二つの本が混ざっているという感じである。一つは、一九九二~一九九三年の一六ヶ月調査を元にする、ボストン市のステーション・ストリート・シェ

ルターを利用する「精神障害あり」とされるホームレスな人々を取り上げる、実に興味深い民族誌である。もう一つは人間経験の本質を探る哲学的なエッセーだが、私の目で見ればこれは失敗で、その結果残念ながら本全体にかげりができてしまっている。後でその話に戻る。

民族誌はマサチューセッツ州立サービス・センターを舞台にする。これは凄く醜い巨大な立体コンクリート城といった建物で、「ボストン」誌は'a brutal citadel of despair'(冷酷な絶望の砦)と描写した(五〇頁)。実際、六〇年代に設計図を書いた建築家、ポール・ルードルフは'Brutalist'(冷酷派)という学派のメンバーであった(四七頁)。見るも恐ろしい波形の灰色壁に寄りかかると血が吹き出る。中に入ると数え切れない暗い廊下があり、それらが曲がりくねって迷路になり、人間をまごつかせて、迷子にさせてしまう。建築家や精神学者はこの迷路建物を狂った人間の魂と例えることが多い。テーマがあるとすれば、それは「癒し」より「拷問」である。

結局、ルードルフの冷酷な設計図を実現するにはあまりにも金が掛かったため、建物は未完成のままで終わってしまった。設計図の目玉は恐ろしい中央タワーだったが、一九七一年でセンターが開業した時、そのタワーはなかった。現在そのタワーは存在せず、建物のど真ん中に醜い傷のような穴がぽっかりと開いている(四九頁)。コンクリートの壁から錆付いた梁が飛び出て、未完成の階段は空中で終わってしまい、鉛管や電気ケーブルが風雨にさらされている。時間が止まったままのような建設現場である。

シェルターの利用者はこの悪夢のような建物で生き残れることだけでも大したものだし、建物を嫌う人がいれば慣れてきて何となくちょっと好きになる人さえいるそうだ。本に載っている写真を見て、釜ヶ崎のあいりん労働センターを思いだした。これも醜い、巨大な官僚的な建築の産物でありながら、長年そこにいる人々の精神によって何となく人間が居られる環境になっている。人間にはこういうふうに最低な公営建物でも「ホーム」に変身させる能力があるとイギリスの社会学者、ダニー・ミラーが指摘している。彼はその行動を'appropriation'(個人による国家の施設の「差し押さえ」)と呼ぶ。ロンドンのスラム団地に住むカリブ人の台所の工夫した飾り方を一つの例として挙げている(Miller 1988)。

ボストンにあるこの州立サービス・センターは、現代資本主義国家の精神病患者に対する態度の絶妙な隠喩に

なる。設計図はベンタムのパンオプティコン(Bentham's panopticon、九六―一〇四頁)そのものである。すなわち、どの角度からも収容者を完全に観察することができるし、完全に管理できる施設にほかならない(Foucault 1977参照)。しかし逸脱者を完全に管理することは金がかかる。ポスト・レーガン、ポスト・サッチャーの資本主義は税金を減らし財政支出も最低限に抑えるのを美徳とする。「過保護国家」を解体し、国民に自活させる。そこで米英の刑務所の人口がどんどん膨らんできたと同時に、精神病患者と見なされる人々がどんどん路上へ追い出されてきた。ルードルフのタワーが設計図のままで終わったことが、レーガノミックスと社会管理論の矛盾を立体的に象徴する。[4]

ルードルフの砦の崩れた跡の隅々に約五〇人の居住者が生きている。約四割は女性である。居住者は管理人の目が届かない場所をすべて知っている。階段の下、道具入れ、使い道の不明な小さな部屋等である。そういうところで休んだり、喋ったり、タバコやマリファナを吸ったり、たまにはセックスさえしている。寝床はバスケットボール・コートで、スクリーンで男女を分けるだけである。朝食と夕食が付くが、午前九時から午後三時までは外へ出なければならない。やはり、国家管理は限られている。昼間は居住者を外へ追い出すのは、ほとんどのアメリカのシェルターの習慣だと思う。

デジャレーが指摘する通り、「療法の文化は資本主義の文化に相殺される」(一七七頁)。一方では居住者は「病人」で、薬やサイコセラピーによって病気を治してもらう存在である。他方では自立・自主というアメリカ風資本主義の価値観を身に付けて生活するようにさせられる。

本書は四一章編成で、気取った文芸的なスタイルで書かれている。章は短い。番号がなく、文学的なタイトルだけある。個人としての居住者はせいぜい一～二ページしか出番がなく、代りに彼らの行動や発言がインテリっぽいテーマの事例として紹介される。結果として、とても面白そうな人間達をチラッとしか見られない。シェルターに入る前の人生、またはシェルターにいない時の生活がほとんど話されておらず、デジャレーはそれに関して知識がないと認めている(二四三頁)。シェルターの人口編成もほとんど論じられない。例えば、一八人の女性居住者のうち非白人は六人なのに、二八人の男性居住者のうち三人のみが非白人という興味深いデータについて

もまったく論じられていない（確かにサンプルはやたら少ないが、女性ホームレスには男性の場合よりマイノリティーが多いという点で、先ほど紹介した、グラサー本で引用される全米大型ホームレス調査と似たパターンなのは示唆的である）。つまり、著者はシェルターという公共施設に限定して焦点を当てているが、民族性やジェンダーにはあまり注目していない。

この限定的な視角にはよい面もある。官僚的な環境の中で個人の生活戦略・作戦を鮮明に描いている。病理的に見える振舞には罰則があり、極端な場合、四階にある閉鎖的で厳しい体制で恐れられる精神病棟に移動させられることがある。反面、管理者の「人間改善」に従う振舞は称賛や特権で報いられる。シェルターの売店で買い物ができるトークン［代用貨幣］という具体的な御褒美もある。しかし、「改善しすぎ」もあり、その場合は「精神的に病気でない」と判断され、シェルター利用許可が取り消されるリスクもある。人によって、それは「卒業」ではなく「追い出し」と思われることがある。つまり、この施設の環境に適切な振舞は、改善を控えめにし時折り病気となることを覚えておくことである。その結果、「一時的」なシェルターの四六人の居住者のうち三三人は一年間以上住んでいて、その一五人は二年間以上住んでいた。

居住者の精神病的パフォーマンスとして色々の面白い例が出ている。管理人の前で床を行ったりきたり歩き回ったりする（一三七～一四〇頁）。がっかりしているように肩を落として、伏し目がちに歩く（二三五～二三七頁）……。直感的な行動と自覚をもった行動が微妙に混ざっているという感じだが、とにかく環境と行動が深く結びついている。ゴフマン（Goffman 1961）の強い影響を認めるデジャレーは、シェルターを劇場の舞台として読む。「舞台」にいる患者達はどうしても「俳優」のように振舞う。こうして個人レベルで施設の再生産の仕組みを見せてくれるデジャレーは、施設の働きを理解させてくれる点では重大な貢献をしている。

ただ残念なのは、この価値のある民族誌はかなり疑わしい「人間経験理論」という枠組みをもっている点である。本の冒頭でデジャレーは、「経験」（'experience'）と「しのぎ」（'struggling along'）は異なるものだと断定する（一〇～二四頁）。彼によるとシェルターの居住者は物事を経験できず、毎日一時凌ぎで生き残るのが精一杯である。「明けても暮れても、物事は心や身体の分離した安

息所ではなく、網膜・鼓膜・指先で起こった」(二四頁)。よくも人間の内面をこんなに鋭く見ぬけるものだ！　この「経験のない人生」のテーマはその後でほぼ消えるが、最終章でフォルティッシモで戻ってくる。すなわち曰く、「現在ますます貧困とはかなさで特徴を与えられている数多くの社会の周辺生活から言うと「経験」はある社会集団には過去の遺物になりうる」(二四九頁)。なぜか、テーマは精神上の健康から貧困に漂流しているが、「貧乏人は経験できない」という極めて奇妙な主張は人間社会の一部に一番根本的なレベルで区別(差別?)をつけるものだ。

しかしデジャレー自身が描くシェルター居住者は決して「普通な人間」と質的に違うという印象を与えない。多少エクセントリックな振舞はある。長い、散漫な話はする。長い間じっと立って何もしない。たまには怒鳴りあう。資本主義の論理を無視して一週間一〇〇%の利子で金を借りる(一〇ドルを借りて、来週二〇ドルを返す)。福祉手当の一ヵ月分を数日間で使ってしまう。だがこういう行動は寄せ場でも見られるし、時々大学の研究室でも見られる。ここには主流人間のような「経験」が存在しない、という指摘はナンセンスだ。であるのに、この本は一九九九年、人道主義人類学協会(Society for Humanistic Anthropology)のビクター・ターナー賞を受賞した。ちょっと納得できないところである。

Braving the Street: The Anthropology of Homelessness, by Irene Glasser and Rae Bridgman

アイリーン・グラッサーとレー・ブリッジマン著、『ストリートをものともしない――ホームレスの人類学』

New York and Oxford: Berghahn Books, 1999, xi+132pp.

前出のHomelessness in Global Perspectiveの出版から五年後、グラッサーはこの二冊目を出した。共著者のブリッジマンはカナダ人でカナダのヨーク大学の若手社会人類学者。女性コンビである。中身の二割ほどはグラッサーの前の本と重なっており、五年が経っても前回の「浮浪者」等の疑問すべき図がほぼそのままで出ている(一二頁)。もう少し勉強しても良かった。

だが、これは前の本より面白い。そもそも無理だった

グローバルな視野を止めて、代りに北米に集中し、より充実した中身になっている。それに男・女・子・家族の編成もやめて、ホームレスネスのパターン・説明・脱出や路上生き残り法というテーマで章を並べる。ブリッジマンはカナダの事情を紹介するという大きな貢献をしている。カナダの行政はこの問題に対してアメリカよりずっと進歩的で金を使う心構えもある。著者たちは個人の病理的な説明を否認し、幅広い社会・文化的なコンテクストでホームレス現象を見ながら(一〇~一一頁)、山ほどある九〇年代のホームレス人類学研究を簡単に紹介する。読みやすい本で英語力が抜群ではなくても学生が読めるはずだ。

紹介される研究者のなかでもアンナ・ルー・デハヴェノン(Dehavenon 1995, 1996)とジェーン・フィッチェン(Fitchen 1994, 1996)はとくに面白そうである。二人ともアカデミシャンであるにも拘らず運動家として行政によりよい政策を求めるし、二重家庭問題を分析するという共通点がある。前者は大都市、後者が田舎を調査の場にする。デハヴェノンは一五年間もニューヨーク市のホームレス家族を研究し、その家族を助けるために存在する市の緊急援助団(Emergency Assistance Units; EAUs)を強く批判してきた。ニューヨークのホームレス家族の七八%は二重家庭からホームレスに転落するがたびたびEAUがその家族を別な家族と暮らさせるのみで、結果として二重家庭に戻すに過ぎない。デハヴェノンはこの二重家庭の質的調査に取り組み、充実した家庭生活が不可能だと示している。そして学者として珍しいことに、その調査の結果を公開発表したり記者会見を行ってマスコミにもひろく情報を提供している。

ホームレス研究はほとんど大都市の現象として扱われるから、フィッチェンの研究はとくに価値がある。彼女は長年ニューヨーク州の北部で貧しい家族の生活形式を調べている。ここの二重家庭問題は深刻で、「一つの家に二つの家族」というよりも、一つの小さなアパートや一つのトレーラーに二つの家族というケースが多い。これは耐えられないストレスを与えるという。主な原因は(1)生産業の崩壊による田舎の高い失業率、(2)家賃を払う能力をもたないシングル・マザーの増加の二つ。二重家庭現象以外にも、様々な「隠れホームレス」がいる。例えば女性がボーイフレンドとの性的関係が終わっても、彼が住む場所がないから彼女が仮に彼を自分のアパートに泊めてやる。フィッチェンの推奨する政策の一

例として、トレーラー・パークの持ち主がそのパークを閉業したいとき、パークの利用者が共同でパークを購入し、生協の形で運営すればどうか、というものがある。

ホームレスとなることの原因として高級住宅化とワンルーム・ホテルの解体が大きく取り扱われている(四九～五一頁)。グラッサーとブリッジマンはジェンクスの論争を招く「スキッド・ロウ再現論」を完全に無視する(因みにデジャレーも、ロウも、ジェンクスを無視している)が、格安ホテルのプライバシーある自立生活からシェルターのプライバシーなき依存的な生活への移動を問題視する点は同じだ。色々の革新的なホームレス男性向きの公営住宅事業を論じた上で、こう語る。「皮肉なのは、便利な場所にある、他の単身男性の仲間が身近にいる、(つまり、昔のスキッド・ロウとかなり似ているもの)は一番革新的なホームレス住宅事業が目指している理想である」(一八頁)。ジェンクスの荒っぽいトーンを拒否しながら、彼の考えの本質は意外と受け入れているという感じだ。

しかし著者たちが紹介する革新的な住宅事業は単なるドヤのようなものではなく「公営的な改善済みスキッド・ロウ」というようなものである。例えばトロントにある「ストリート・シティー」は「元ホームレスの人々のための民主的な共同生活システムの実験」である(Glasser 1994: 36)。産業地帯にある改装された倉庫に男女七〇人が個人部屋に住んで、共同浴場や台所を使う。福祉で生きている人は月三五〇カナダ・ドル、仕事のある人は賃金の二五%を、それぞれ家賃として支払う。この「シティー」には選挙で決める「男市長」と「女市長」('mayor' and 'mayoress')がいて、定期的な会議で居住者と建物の経営について話し合う。居住者の一部は建設労働者で、ストリート・シティーの建設にも参加した(Glasser and Bridgman 1999:100)。建設・改装費五〇万カナダ・ドルで、地元の行政(トロント市、オンタリオ州等)がその全額を負担した。

ストリート・シティーには二人の当直スタッフが二四時間いる。しかし門限はないし、禁酒や麻薬禁止という規則はない。この点はほとんどの北米のシェルターと違うが、著者たちが別なところで指摘する通り、飲酒や麻薬を堅く禁止すると依存性のあるホームレスの人々はなかなか路上生活をやめてシェルターに入ってくれない(二七頁)。ちなみに私の故郷(英国・オックスフォード市)には数ヶ所のシェルターがあり、その一つは去年の夏か

ら禁酒規則を取り消し、市初の"wet shelter"(飲酒容認シェルター)になった。やはり、禁酒だとどうしても人が来ないというのが理由だが、市にそれ以外の"dry shelter"(禁酒シェルター)があるからこそそういう実験ができるとも言える。

ストリート・シティーは一九八八年に開館した。もともと仮住宅設備(transitional housing facility)として計画されたが、いつの間にか半永住的なものになった(この点だけはデジャレーが見たボストンのシェルターと同じだ。やはり、シェルターでも、「住めば都」ということか)。九五年からオンタリオ州はさらに三三〇万カナダ・ドルを使い、今使われていない別の倉庫でストラカン・ハウス(Strachan House)という、より永久的な共同住宅を作った。中にはサヴァーツ(Savards)という小さな一〇人収容の住宅設備があり、これは精神的に悩んでいる女性専用だ。このトロントの事業は居住者が建物の全ての管理を責任持って行う「自助住宅」(self-help housing)の試みである(一〇〇~一〇六頁)。

これ以外にも、次のようなホームレス対策が紹介されている。

アウトリーチ(outreach)――社会福祉のケースワーカーが、人が福祉事務所に来るのを待つのではなく、積極的に彼らがいる場所へ足を運び当事者から事情を聞き、利用できるサービスを説明する(九〇~九一頁、下記のロウ著書参照)。

デイ・ケアー(day-care centers; daytime respites)――ホームレスの人々が昼間立ち寄って、シャワーやランドリーといった基本サービスを利用しながら寛げる場所(九二~九六頁)。

支援住宅(supportive housing)――共同住宅にプロの相談員を置く。またはホームレスな家族を「養家族」(foster family、場合によりその養家族もホームレス経験者である)と一緒に暮らせる(九七~九九頁)。

ホームステディング(homesteading)――合法スクォッティング、つまり利用されていない建物への住み込みを認めること、または空き地に小屋作りを認めること(九九~一〇〇頁)。

しかし、「予防は治療にまさる」。ホームレス予防政策に関しても(少し)資料が紹介されている。家賃が払えなく立ち退かされるのが野宿の大きな原因だが、ニュー

ジャージー州パサイック(Passaic)市には大家と借家人の調停事業があり、一九九〇年の一年間で一三〇〇件を調停して妥協案を成り立たせたそうだ。これによりホームレスになる間際だった大人と子供計三六〇〇人が救われたという(二二頁)。

それにしても、当たり前なことではあるが、貧困層を対象とする福祉政策がしっかりしている社会は、そうでない社会よりホームレスの人々が少ないに決まっている。どの程度困ったら行政の助けを得られるのかは一つの勝負どころで、これに関してカナダとアメリカの比較は興味深い。一九八六年の「福祉手当適用相当な年収レベル」、つまり貧困線の定義は、四人家族の場合、アメリカは一一、二〇三ドルに対してカナダは一七、三三〇ドル(いずれも米ドル)であったそうだ(一〇九頁)。データは確かに古いが、この一六年間でそのギャップは大して小さくなったと思えない。それに、「社会住宅」(social housing、低所得者用公営住宅)はアメリカよりカナダの方がずっと充実している(同)。この要素をあわせるとカナダのアメリカより低いホームレス率は良く分かる。但し、カナダの税金はアメリカのよりずっと高いのも有名な話だ。

グラッサーとブリッジマンは「なぜ、実行され、成功した事業はあまり広く真似られない?」(一一一頁)という質問に対して二つの答を提案する。まず「金がかかる」のは勿論のことだが、もう一つは「なぜか行政が他の都市や地域の行政の経験から見習わない」(同)。結果として、同じ間違いが何回も繰り返される。さて、日本の行政はどうだろうか?

***Crossing the Border: Encounters Between Homeless People and Outreach Workers*, by Michael Rowe**

マイケル・ロウ著、『境界を越えて——ホームレスの人々とケースワーカーの出会い』
Berkeley: University of California Press, 1999, xiii+193pp.

先ほど「アウトリーチ」事業に触れたが、この本は極めて生々しい、かつ詳細なアウトリーチ事業の民族誌である。場所はあのエール大学で知られているコネチカット州ニューヘイブン市。事業の対象はこの中型都市にいる精神的に悩んでいるホームレスである。著者のマイケ

ル・ロウはエール大学精神医学部の「社会学臨床講師」と、かなり複雑な肩書きだが、本にも「社会学・人類学・心理学」という学問分類が表紙に書いてある。

アメリカには八〇年代から「積極的な精神健康アウトリーチ」(assertive mental health outreach)が所々で実行され、このニューヘイブン事業は一九九三年から始まり、全米一八ヶ所にあるアウトリーチ事業ネットワークの一角である。名前はACCESS(Access to Community Care and Effective Services and Supports;共同ケアと実用的なサービスと支援へのアクセス)ということで、ロウは一九九四年からその事業の指導者を務めた。この本は彼自身の経験と約五〇人の野宿者との面談調査を基にして書かれたものである。

アメリカにおいては「アウトリーチ」という言葉は現在すっかり流行語になっている。基本概念は簡単である。すなわち、一番助けを必要とする社会の構成員はかえって助けを求めない傾向があるため[3]、社会福祉は自発的に助けの手を伸ばして(reach out)、困った人を探して彼らに福祉制度を説明し、その制度を使えるよう説得する、ということだ。同じ言葉は宣教師の活動という宗教的な意味にも使うケースが多いし、やはりキリスト教文化の影響を感じる。

ロウが指摘する通り、この善意から出たアプローチは多くの皮肉をもたらす。まず、アウトリーチ・ワーカーは「助けを必要とする人」を探しに行くが、その人は必ずしも助けが欲しいと限らない。そういう人に「福祉を売り込む」と同時に、逆に助けを求める人を拒否することもよくある。各アウトリーチ事業は「目標人口」(target population、五九頁)を設定するが、ACCESSの場合はその目標人口は「ホームレス精神障害者」で、「アルコールや麻薬乱用者」をはっきりと排除する。しかしロウが認めるように、多くの医学者は物質依存性を精神病と見なしているし、依存者は他の精神病の症候を見せるケースも多い。著者も含めて、アウトリーチ・ワーカーの一番嫌な仕事は「障害の種類が違うため人に門前払いを食わす」ということだ(六〇頁)。しかも、「大体すぐ助けを求める人はその助けを受ける資格がないのは経験から得た知識だ」(同)。

アメリカの社会福祉制度は予算が不充分という持病があるから、どうしても助けられる人と助けられない人がいて、どこで線引きをするかはこの本の大きなテーマである。ワグナーの「チェッカーボード広場」にも同様の

テーマが出てくる。「ノース・シティー」では住宅援助を申請する人たちは必ず「薬物乱用者ですか?」や「精神障害者ですか?」と聞かれるが、そういう者であるため拒否されることも、そういう者ではないため拒否されることもあったという皮肉の極みのようなことさえあった(Wagner 1993、一〇〇頁)。理論上分類化は、専門的な援助をそれを一番必要とする人に与える方法だが、実際はホームレス人口の大半を勝手に少ない援助の枠外とする、というかなり荒っぽい手段として働くケースが多い。(ただしロウによると、何回も口汚い酔っ払いに金くれ家くれと大声でたかられるとそのアイロニーに関して次第に敏感でなくなることがあるそうで、何となくそれは想像ができる。)

アウトリーチ・ワーカーはどうやって「ホームレス精神障害者」を見分けて接近するのか? ロウの非常に興味深い説明を読むと更なる皮肉が見出される。まずワーカーが無料食堂やシェルターでブラブラしながらそこにいる野宿者を観察し、誰が事業の規定による「ホームレス精神障害者」の定義に沿うかを推定する。例えば、自分に話し掛ける人、変わった手真似をする人、あるいは物静かで他の人に関わらない人。言うまでもなく、「ホームレスだが精神障害者でない」人や「精神障害者だがホームレスでない」人に誤解してアプローチすることは多い。

さて、ある人が事業の「お客さん」(client)、または「患者さん」(patient)(ロウはその二つの概念を面白く論じる、一二九頁)になる可能性があると判断すれば、次の段階は「手を伸ばす」ことだ。アウトリーチ……それは「迷える羊」を探す宣教師、離反者を探すスパイー、ガールハントする男、を思い出す行動である。この、ロウが「境界取引」('boundary transactions')と呼ぶ、アウトリーチ・ワーカーと客/患者の間のやりとりは妙な道徳的な両義性の雰囲気に満ちている。

「相手が喫煙者であれば俺はタバコ一本出すかも。びんの収集をしていれば、車のトランクに貯めてあるボトルを渡す(空ボトルを店に返すと小銭をもらう制度がある)。ある日、ボトルを受け取った人がいた。彼の毛布はボロだと気づいたから、今回毛布を渡した。毛布も受け取った。会うたびに俺は贈り物を持っていた。次第に友達になった。しかし何と言っても彼に釣り針が引っかけて、俺のそばに引っ張ったのは、彼の話を聞く俺の心構えだったと思うな。」(六三頁、傍点は評者)

いったん相手に話をかけたら微妙な交渉が始まる。ある意味では普通の力関係は逆転する。というのは、アウトリーチ・ワーカーは定員まで客を募集する契約上の義務があり、野宿者に書類にサインしてもらう必要がある(九一頁)。しかしその一方、野宿者は正式に自分がホームレスであり、精神障害者であることを認めなければいけない。これは言うまでもなく、極めて屈辱的な経験でありうる。その反面、「障害者」しか助けてもらえない状況だと「正常」な人が障害者のふりを生き残り作戦にしても驚くことではない。デジャレーが描写する人と同様に、精神病であるように見せかける理由があるのだ。

「境界の取引」が成り立ってもその両義性は続く。ACCESS事業に登録する野宿者はアパートや家具をもらい、アウトリーチ・ワーカーが社会福祉や医療当局との交渉を手伝ってくれる。人により、かなり利益を得ることもある。例えば、ある客は立派なマンションと上品な家具を事業の金で買ってもらったという話がある(八七頁)。

だが、これもまた人によってだが、相当な代償も払わなければいけない(一〇五~一一三頁)。①人のプライバシーは犠牲になる。路上の世界では身分を隠すため偽名やあだ名を使うことが多いが、アウトリーチ事業に参加すると必要書類が沢山あり、そこで書き込む個人データは必ず後で確かめられる。②路上生活者はある種のコミュニティーに属するとすれば、そのコミュニティーを後にして一人暮らしに慣れなければならない(一〇六頁)。ロウの本に繰り返しあらわれるテーマは、人を「独房監禁」(大げさだが)のような一人暮らしを宣告する罪の意識である。③元野宿者は「客」になるのを我慢しなければならない。路上生活の自立生活を断念し、敵対意識をもった行政に依存せざるをえない。④いくら助かっても、事業の客が完全な意味での市民権を得ることはありえない。せいぜい二流市民権、ロウの言う「事業市民権」(program citizenship)、つまりホームレス援助事業によって得られる市民権(一四六~一五五頁)だ。

ロウが嘆かわしいと話すアウトリーチ事業の問題点は、想像力に欠ける住宅論に基づいていると思われる。例えば、元ホームレスが一人暮らしに向いていなければ、なぜ、より共同的な住宅生活を提供しないのか? グラッサーとブリッジマンが紹介している代替住宅方式を大いに必要とするようだが、ロウはグラッサーの九四年の本を引用していないし、奇妙にも全く代替住宅方式を意

識していないようだ。(デジャレーもやはりそうで、シェルターの問題点を数々指摘するが、代わりに具体的な対策を論じていない)。

全体として、『境界を越えて』は非常に価値のある本だ。著者は人類学者の目のほかにプロのアウトリーチ・ワーカーの経験を持ち、アウトリーチ・ワーカーと野宿者の複雑な人間関係をとても敏感に見ている。ジェンクスのように'the homeless'という表現を使うことはありえない。ここに出てくるのは三次元の世界に生きる人間そのものである。

ただ時として改革運動家の熱意がテキストに染み込むことがある。例えばアウトリーチ・ワーカーと野宿者の出会いを「カリスマ的な出会い」('charismatic encounters'、何それ?)と呼ぶのはおかしい(九五頁)。より詳しくは(一二三~一四六頁)、「ホームレス・アウトリーチ・チームの社会心理学」を論じてそのチームの「原型的なメンバー」を描写する。「指導者」、「反抗者」、「犠牲者」等という具合で、三流テレビ・ドラマの脚本のような印象を受けてしまう。やはり資本主義社会の「最暗黒」の周辺へ出ていって一番困った人の救助を敢行するには、それなりのやり方(ダクマー)があるようである。

[海外進出文学]論 第1部

火野葦平論

池田浩士著

戦前・戦中・戦後、この三つの時代を表現者として生きた火野葦平。彼の作品を通して戦争・戦後責任を考え、海外進出の20世紀という時代を読む。本書は、火野葦平再評価の幕開けであり、同時に(いま)への根底的な問いである。 五六〇〇円+税

天皇制とジェンダー

加納実紀代著

フェミニズムにとっての女性天皇制をどう考えるか。敗後の女性史とリブ、フェミニズム、そして天皇制に深くこだわってきた著者の母性と天皇制をめぐるアクチュアルな発言。 二〇〇〇円+税

有事法制とは何か

その史的検証と現段階

纐纈厚著

今国会で最大の焦点になる有事法制—「不審船」撃沈が象徴する日本の戦争国家化、国民動員体制。今この国の向かおうとしている危険な道に警鐘を鳴らす。 一九〇〇円+税

安田さんを支援する会News

1~20号 復刻合本 安田さんを支援する会編

社会から遠ざけられ、疎まれ、声を発することさえ遮られる人々の声を代弁してきた安田好弘弁護士にかけられた刑事弾圧。市民を守る弁護士を市民が守るときがきた。オンデマンド方式による少部数出版。 四〇〇〇円+税

インパクト出版会

〒113-0033 東京都文京区本郷2-5-11 服部ビル
TEL:03-3818-7576 FAX:03-3818-8676 E-mail:impact@jca.apc.org
郵便振替:00110-9-83148 http://www.jca.apc.org/~impact/

そして不可解にも、デジャレーとまったく同じ過失を犯して、野宿者は「人間の経験」から除外されてしまう(三二~三四頁)。「野宿は現実性の損失だ、経験を失った存在だ。存在そのものではなく、存在の影だ……現実の一部を所有するものは人間的で、それをただ持ちたいと思うことしかできないものは人間的でない」(三三頁)。デジャレーとロウの二人ともそれまでの人道主義な観点を突然投げうって、「人間」と「野宿者」の間にこのような不気味な区別をつけるのはいったいなぜなのだろうか? 私には本当に不可解である。

むすび

結局、ここで書評した本から得られるイメージは、増え続けるホームレス人口に対するアメリカ社会の根深い混乱である。互いに対立する進歩的と保守的な理想であり、助けたい衝動と野宿者に自助してもらいたい熱望であり、それぞれ相違する連邦・州・都市の行政である。いくつか成功例もあるが、全体として一貫性がなく、楽観できる理由はあまりない。

アメリカと比べたら、日本は幾つかの有利な点がある。野宿者の人数は増えているがまだまだアメリカのそれよりずっと少ないのである。精神病院の過剰人口は別な問題ではあるが、ホームレス精神障害者が比較的に少ないのは事実だろう。酒とタバコ以外の麻薬に依存する野宿者も割合少ない。また、日本の家族には困窮している親戚の面倒を見る傾向は割合強いと思われる。

その反面、日本の野宿者が自分について語るとき、アメリカの野宿話であまり頻繁に出ない要素が二つある。それは賭博と借金である。[6] 競馬やトランプは両国共通だが、アメリカにはパチンコ・マニアに当たるものはちょっとない。それに横浜・寿町の隣りにある松影宿泊所(ホームレス・シェルター)の管理人に聞いた話によると、居住者の半数以上はサラ金に払い切れない借金があるそうだ。ホームレス問題はある程度まで不景気や失業という世界中普遍的な原因があろうが、その上に文化的な要素がのしかかる。アメリカの場合が麻薬や精神障害者の社会への流出だとすると、日本ならギャンブルやサラ金がそれに当たるのではないか。私自身も何回か、ギャンブル依存性の上サラ金に借りすぎているという話を、寄せ場で聞いている。日本の文化には個人破産を宣言することに対してまだまだ抵抗感が根強い、ということが問題の一部として存在するかもしれない。

マイケル・ロウはこの五冊の本の最終メッセージに相応しい次のような言を発している。「どうも、われわれ（アメリカ人）は極端な貧困に寛容になってきた上、今後更に数百万人がそうした貧困状態に漂流することを止める能力も義務もないという考えさえも容認しているようである」（一六〇頁）。ジェンクスの妙策はいくら時代遅れに見えても、広域に普及した極端な貧困の容認を前提にすれば有意義である。日本においてはその極端な貧困の拡大を容認する時期はまだまだ遠いと思いたい。

註

（1）このエッセーの英語版をカリフォルニア大学のマシュー・マー氏に見てもらい、幾つかの貴重な指摘を頂いた。感謝を申し上げます。

（2）ニンビー：NIMBY, 'Not In My Back Yard'（「うちの近くはお断り」）のイニシャルから作られた言葉。つまり、施設の必要性は認めても、自分の家の近くに建ててほしくないという、世界中に見られる市民運動の動機である。Lesbirel(1998)、清水(1999)参照。

（3）英国政府のRough Sleepers Unit（路上生活者ユニット）報告。二〇〇〇年一二月三日のBBC記事 (http://www.bbc.co.uk/hi/english/uk/england/newsid_16880

アメリカの「人道的」軍事主義 チョムスキー
コソボの教訓「ユーゴ空爆は民族浄化を阻止するために行なわれた」？ 世界に君臨する超大国による「人道的な介入」。強大なメディアを通じて世界に浸透する神話を痛烈に批判する。益岡賢ほか訳 二八〇〇円

アメリカが本当に望んでいること チョムスキー
「戦争は平和、自由は奴隷制、無知は強さ」と言いくるめて、思うがままに世界を支配する米国。この米国の外交政策を変えれば、世界はもっと住みよくなるという確信から生まれた批判の論理。益岡賢訳 重版出来。 一三〇〇円

アフガニスタンの仏像は破壊されたのではない 恥辱のあまり崩れ落ちたのだ マフマルバフ
映画『カンダハール』とこのテクストがなかったならば、「9・11」以後の言論状況はきわめて悲惨なものだったろう、と評されるに至った、イランの映画監督によるアフガニスタン論。武井＋渡部訳 六刷出来。 一三〇〇円

友だちみんなの中で 松下佐智子＋鈴木奈実
ADHD児を育てる・母親と教師の交換日記 子どもの特性と障害を正しく理解して受容するとはどういうことか。最善を尽して「待つ」子育て論。佐々木正美序文 一五〇〇円

■選ってきた若き日のゲバラ
モーターサイクル南米旅行日記 好評六刷 二〇〇〇円
AMERICA 放浪書簡集 新刊 二二〇〇円

101-0064 東京都千代田区猿楽町2-2-5 **現代企画室** Tel 03-3293-9539 Fax 03-3293-2735
http://www.shohyo.co.jp/gendai/ E-mail:gendai@jca.apc.org

00/1688651.stm）参照。

（4）マシュー・マーとの話によると精神病院人口減少と刑務所人口増加はお互いに深い関連がある。元精神病院患者が釈放後「犯罪」を起こし刑務所で収監されるケースが多く、例えばロサンジェルス郡立刑務所には約二〇〇〇人の精神障害者がいて、実質的にカリフォルニア州最大の精神病院になっているそうだ。

（5）福祉サービスの存在を知らない・使うのが恥ずかしい・使ったら麻薬をやめなければならないから使いたくないと、理由は様々である。こういう福祉を使いたがらない人は福祉用語ではservice resistant（「サービス提供者」）と呼ばれている（マシュー・マーとの会話による）。

（6）但し、マシュー・マーと話したところによると米国のシングル・マザーがアパートを探すとき、借金（特にクレジット・カードの借金）があるのは邪魔になることがよくある。

参考文献

ギル、トム　一九九九年　「マージナルな男たちの比較研究——日本の寄せ場、アメリカのスキッド・ロウ」　『人間・文化・心——京都文教大学人間学部研究報告』第二集、三七～五二頁。

ジェンクス、クリストファー　一九九五年　『ホームレス』東京：図書出版社。

清水修二　一九九九年　『NIMBYシンドローム考——迷惑施設の政治と経済』　東京新聞出版局

山崎喜比古と瀬戸信一郎（編）　二〇〇〇年　『HIV感染被害者の生存・生活・人生——当事者参加型リサーチから』　有信堂高文社

リーボー、エリオット　一九九九年　『ホームレスウーマン——知ってますか、わたしたちのこと』　東信堂

Burt, Martha. 1992. *Over the Edge: The Growth of Homelessness in the 1980s*. New York: Russell Sage Foundation.

Caplow, Theodore, Howard M. Bahr, and David Sternberg. 1968. 'Homelessness.' In David L. Sills ed., *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 6: 494-8. New York: Free Press.

Dehavenon, Anna Lou. *Out in the Cold: The Social Exclusion of New York's Homeless Families in 1995*. New York: Action Research Project on Hunger, Homelessness and Family Health.

———ed. 1996. *There's No Place Like Home: Anthropological Perspectives on Housing and Homelessness in the United States*. Westport CT.: Bergin and Garvey. Includes Dehavenon, 'Doubling Up and New York City's Policies for Sheltering Homeless Families,' 51-66.

Fitchen, Janet M. 1991. *Endangered Space, Enduring Places:*

Change, Identity and Survival in Rural America. Boulder, Co.: Westview.

———. 1994. 'Welfare Reform for Rural America.' *Practicing Anthropology* 16 (4) : 17-22.

———. 1996. 'Rural Upstate New York.' In Dehavenon ed., 1-17.

Foucault, Michel. 1977. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. New York: Vintage.

Gill, Tom. 2001. *Men of Uncertainty: The Social Organization of Day Laborers in Contemporary Japan*. Albany NY: SUNY Press.

Glasser, Irene. 1988. *More Than Bread: Ethnography of a Soup Kitchen*. Tuscaloosa, AL: University of Alabama Press.

Goffman, Erving. 1961. *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patients and Other Inmates*. New York: Anchor Books.

Jencks, Christopher. 1992. *Rethinking Social Policy: Race, Poverty and the Underclass*. Cambridge MA: Harvard University Press.

Lesbirel, S. Hayden. 1998. *NIMBY Politics in Japan: Energy Siting and the Management of Environmental Conflict*. Ithaca: Cornell University Press.

Liebow, Elliot. 1967. *Tally's Corner: A Study of Negro Streetcorner Men*. Boston: Little, Brown.

———. 1993. *Tell Them Who I Am: The Lives of Homeless Women*. New York: Free Press.

Marr, Matthew D., 1997. 'Maintaining Autonomy: The Plight of the American Skid Row and Japanese Yoseba.' In *Journal of Social Distress and the Homeless*, 6 (3) : 229-250.

Miller, Danny. 1988. 'Appropriating the State on the Council Estate.' *Man 23*: 353-372.

Rossi, Peter. 1989. *Down and Out in America: The Origins of Homelessness*. Chicago and London: Chicago University Press.

Snow, David and Leon Anderson. 1993. *Down On Their Luck: A Study of Homeless Street People*. Berkeley: University of California Press.

Spradley, James. 1970. *You Owe Yourself a Drunk: An Ethnography of Urban*

Nomads. Boston : Little, Brown. (Reprinted 1999 by Waveland Press).Toth, Jennifer. 1993. *The Mole People*. Chicago: Chicago Review Press.

Wagner, David. 1993. *Checkerboard Square: Culture and Resistance in a Homeless Community*. Boulder Co. and Oxford: Westview Press.

Wagner, David. 1997. *The New Temperance: The American Obsession with Sin and Vice*. Boulder CO: Westview Press.

———. 2001. *What's Love Got to Do With It? A Critical Look at American Charity*. New York: The New Press.

Wiseman, Jacqueline. 1970. *Stations of the Lost: the Treatment of Skid Row Alcoholics*. Chicago: University of Chicago Press. (Reprinted 1979).

〈東京大学社会科学研究所所員／社会人類学〉